

宮岡真央子・渋谷努・中村八重・兼城糸絵（編著）『日本で学ぶ文化人類学』

■ 出版地：京都 ■ 出版社：昭和堂 ■ 出版年：2021年 ■ 総頁数：268頁+x ■ 定価：2,300円+税

菅沼 文乃*

本書は、「人間とはなにか」を文化を手がかりに探究する文化人類学についての入門的教科書である。その最大の特徴は、日本を主題材として文化人類学を学ぶという企図である。様々な異文化をフィールドとする、というイメージが根強い文化人類学の入門書にこのような枠組みを設けた理由について、「はじめに」では、本書で文化人類学を学ぼうとする（日本文化に属する）読み手が本書内で紹介される諸事例を「なるべく『我がこと』として考えられる」（宮岡：iii）ことを目指したと述べられている。したがって、本書内には日本文化研究や日本民俗学などの成果に言及する部分はあるものの、主軸はあくまで文化人類学に置かれており、日本社会を文化人類学的な思考・視線から相対的にとらえることの意味と、それを日常に生かす手がかりを説く内容となっている。

本書は全13章とコラムで構成されている。文化、家、家族、信仰・宗教といった文化人類学の教科書で必ず取り上げられるようなトピックだけでなく、古い、記憶、観光、在日外国人、自然災害といった比較的目的新しいテーマも取り上げられている。読者は興味に応じて好きなテーマを選んで読むこともでき、各章の最後には振りかえりを助ける課題とブックガイドが付属している。

以下、本書の構成を簡単に取り上げる。

はじめに——日本で文化人類学を学ぶ（宮岡真央子）
第1章 文化と出会う——自分と世界を豊かにするために（宮岡真央子）

コラム① 海外の日本研究（川口幸大）

第2章 「日本人」を問い直す——多様性に寛容な社

会に向けて（飯高伸五）

コラム② 国民国家（久保田亮）

第3章 「家」にとらわれる——フツウの家族を考え直す（兼城糸絵）

コラム③ ドメスティック・バイオレンス（飯高伸五）

第4章 生を終える——老いと死のこれまでとこれから（兼城糸絵）

コラム④ 臓器移植（中村八重）

第5章 信じる——日本社会における祈り（西村一之）

コラム⑤ 遺骨返還問題（玉城毅）

第6章 性を生きる——私らしさとは（中村八重）

コラム⑥ 同性婚（西村一之）

第7章 人とつながる——日本の同調圧力と自由な「空気」（玉城毅）

コラム⑦ 売買春（尾崎孝宏）

第8章 記憶を共有する——「識字99%」のニッポンにおける識字運動（二階堂裕子）

コラム⑧ 歴史認識（宮岡真央子）

第9章 文化を売買する——観光の現場で創造・消費される「らしさ」（藤川美代子）

コラム⑨ ゆるキャラブーム（上水流久彦）

第10章 移動する——私たちもまた移民である（松本尚之）

コラム⑩ 「日本人」になる（上水流久彦）

第11章 とともに暮らす——「外国人」を通して日本社会を考える（渋谷努）

コラム⑪ 在日外国人の多様性（渋谷努）

第12章 自然とつきあう——自然災害をめぐる科学知と生活知（藤川美代子）

コラム⑫ 闘牛・闘犬・闘鶏（尾崎孝宏）

* 南山大学

第13章 食から学ぶ——食べることはきっと最も身近なフィールドだ (川口幸大)

コラム⑬ 犬食・鯨食 (中村八重)

おわりに——教室から出る (渋谷努)

「第1章 文化と出会う」は、文化の概念や文化相対主義といった文化人類学の基礎的な考え方を解説する章である。異文化との出会いがもたらす驚きや戸惑い、葛藤をどう考えるかは、文化人類学の教科書・入門書籍で必ずといってよいほど取り上げられるテーマである。本章では、日本文化における女人禁制の規範と、現代社会における男女平等的な一般通念とのずれを取り上げながら、文化人類学的な他者理解の方法を提示する。

「第2章 「日本人」を問い直す」は、「日本っぽさ」「日本人っぽさ」という枠組みへの疑問から出発する。とくに近年、メディアや世間でもよく聞かれるようになった「日本」「日本人」「日本文化」という言葉・表現について、文化人類学における民族研究や日本文化論の文脈からその創生・展開を説明し、最終的にマイノリティや多様性、グローバル化といったテーマへと論を展開する。

「第3章 「家」とらわれる」の副題は「フツウの家族を考え直す」である。出自 (descent)・婚姻・家族に関する文化人類学における基礎的な研究、日本民俗学におけるイエの研究に加えて、近年の女性の社会進出や生殖医療の発展によって注目されるようになった新たな形の婚姻・家族の様相までが網羅される。本章最後では、「家族である／家族になる」という視点が、家族をあらためて問い直すための手がかりとして提供される。

「第4章 生を終える」では人の生、とくに生を終えようとする老いの段階から死後までが取り上げられる。人が生き、死者を弔うという行為は多くの文化人類学研究で取り上げられてきたテーマであり、本章でも通過儀礼や祖先崇拝といった文化人類学の基本的概念が参照される。一方で、筆者の実家で行われた葬儀についての民族誌的記述や、文化人類学でそれ単独に視線が向けられることが少なかった老いについてあつかうなど、独創的な構成がとられる。

「第5章 信じる」は、カバンにつけられるお守りという身近な場面を出発点とする。現在の日本では宗教や信仰といったものへのなじみが薄く、また忌避的感情をもつものが多いといわれるが、一方で祈り、信

じるという行為は、現代日本の暮らしにたしかに根付いている。この事態に対する文化人類学的理解の道筋が、ターナーやリーチによる研究、筆者による神奈川県三浦半島の神社の例大祭におけるフィールドワーク、台湾における事例の紹介を介して、読者に示される。

「第6章 性を生きる」は副題を「私らしさとは」とする。昨今社会的関心を集めるジェンダーや性の多様性という話題が、セクシュアリティやフェミニズムなどの学術的議論だけでなく、スポーツ、昔話、ベストセラー書籍といったさまざまな例を挙げつつ整理される。ここから読者は、社会のなかで生きる自身の性と生を考えるきっかけ、自分らしさを性という切り口から模索する手がかりを得ることができる。

「第7章 人とつながる」のテーマは〈つながり〉である。私たちは日々、他者とつながり、またつながりの中で影響を受け生きている。この〈つながり〉について、これまでの日本社会研究で指摘されてきたタテ社会・ヨコの連帯、同調圧力といったイデオロギー性をはらむつながりに関する理論を解説する。また現代社会の〈つながり〉のありかたを学校・企業の事例から論じ、それに文化人類学的研究が果たす役割を指摘する。

「第8章 記憶を共有する」では、文字によるコミュニケーションについて、記憶の想起や情報伝達という面から検討される。事例として取り上げられるのは、兵庫県の在日外国人の識字活動である。彼らの実践の分析から、情報を伝えること、情報が共有されること、その手段である識字の技術が獲得されることによって「われわれ意識」が広がっていく過程が個人的記憶・集合的記憶・社会的記憶の概念を用いて明解に示される。

「第9章 文化を売買する」のテーマは観光であり、三重県鳥羽・志摩の海女をめぐるまなごしを事例として、観光における「らしさ」「真正性」「ホスト／ゲスト」概念が解説される。現代日本的な鳥羽・志摩観光について、飲食店やイベント、土産物といった読者にとってなじみ深いであろう文脈と観光人類学による分析視点とがくりかえし横断され、これによって読者は観光の場における創造の実践を立体的にとらえることができる。

「第10章 移動する」では移動や移住があつかわれる。グローバル化が進み、国をまたぐ移動が特別なことではなくなった現代社会において、だれが、どこに、なぜ移動するかという移動のありようは多様化している。本章ではこの移動・移住を相対的にとらえる手助

けとして、必ずしも経済活動を前提とするわけでない「ライフスタイル移住」の概念と、アフリカへと向かう日本人の事例を紹介し、移動と居場所の再考を読者にうながす。

「第11章 ともに暮らす」は、他者との出会いと多文化共生について日本に暮らす「外国人」から考える章であり、在日コリアンやブラジル出身者といった日本とは異なる文化的背景をもつ人々との生活が事例として紹介される。ここでは、偏見やコンフリクトをもたらしかねない文化の違いだけでなく、その違いが揺らぎ新たな文化が生まれる様子も取り上げられる。これによって読者は、他者、マジョリティ、マイノリティがだれのことを指すのかを改めて考えることになる。

「第12章 自然とつきあう」では人と自然、とくに自然災害との向き合い方がテーマとなる。自然がもたらす様々な災害の危機にさらされてきた日本社会における知のありかたについて、その克服という科学的アプローチだけでなく、アザンデ社会の研究から示されたエヴァンス＝プリチャードの災因論、自然と寄り添いつきあうための生活知・在来知の概念も参照され、多様な視点からこそ得られる豊かな理解の可能性が示される。

「第13章 食から学ぶ」は、副題にもあるように食を「最も身近なフィールド」とし、そこから文化人類学的日本理解へとアプローチする章である。日本の食の背景にある歴史、異文化の食の取り入れと広がり、だれと食事をとるのかといったさまざまな角度から、また本書の「トリ」として各章で取り上げたテーマを参照しつつ論じることで、食の文化人類学的研究がもつ広がり可能性、私たちの日常に文化人類学的視線を向けることの面白さを教えてくれる内容となっている。

以上が本書の概要である。先にも述べた「日本社会を相対化して思考しようとする視点や手がかりを手に入れる機会を提供する」(宮岡：iii)という狙いは、全体を通して日本社会・文化を対象としつつ、それぞ

れの執筆者のフィールドである異文化の事例も紹介されることで、十分達成されている。また文化人類学的研究に不可欠なフィールドワークの方法を解説する「おわりに」までを読み終えることで、読者は本書を通じて強調される「日常の世界を『斜め』から見る」ということを理解し、自身の今までの当たり前を問い直す視点を身につけることができるだろう。

各章でのテーマの取り上げ方、事例のあつかいは効果的である。章の間に挟まれるコラムも、前にあたる章の内容の補足や別のアプローチを取り上げる内容となっており、読者の視野を広げ興味を深める役割を果たしている。文化人類学における王道のテーマに限らず、性のような現代社会において様相が目まぐるしく変化しうるトピックや、SNS上のつながりやゆるキャラ・萌えキャラというようなより現代的なテーマが取り入れられているのは、いかにも学術的な、堅苦しい教科書という印象を感じさせず、また日々の暮らしの中に文化人類学的研究テーマが潜んでいることに気付いてほしいという意図によるものでもあるだろう。とくに、世界中で関心を集める新型コロナウイルスの大流行について、移動や観光といった頻繁に言及されるテーマだけでなく、死・葬儀や信仰などの関連からも論じられていることは注視したい。もっともこうした取り上げ方は、パンデミックが実に様々な場面で問題となっていることを理解することができる一方で、記述が各章に散在しているために、結果的にやや散漫な印象も受ける。

ともあれ、すでに述べた通り、本書は読者に身近なあるいは差し迫る社会的テーマへ文化人類学的視点を向けることの面白さを分かりやすく紹介するものであり、文化人類学という学問を、異文化に限定されない人の営みへの関心として読者に示すものであると評価できる。文化人類学がどんな学問なのかを知りたい読者、文化人類学を学び始めたばかりの初学者に向けた教科書として最適な一冊である。